



Title	López Albújarとアンデスの世界
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1988, 13, p. 113-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

López Albújar とアンデスの世界

吉田秀太郎

バルガス・ジョサを頂点とする現代ペルー文学は、マヌエル・スコルサ、ブライス・エチェニーケなど、多くの作家を擁して、今や花ざかりの感さえある。

一方、多くの先住民族をかかえるこの国では、特にアンデス地域に住む人たちを描いた作家の数も多く、また優れた作品が見られる。けだしこれはペルー文学の特色の一つとして数えられるであろう。その最も代表的な作品として著名なのはナルシソ・アレスデギとクロリンダ・マット・デ・ターナー、シロ・アレグリア、そして近くはホセ・マリア・アルゲダスであるが、そうした人たちと並んで、この国で高く評価されているのが、表題の作家である。

彼の伝記的な側面について少し触れると、1872年にチクラーヨに生まれ、ワヌコをはじめとするアンデス地域の色んな町で裁判官を勤めた後、1966年、リマに戻って、この地で生涯を閉じている。その間、一時ジャーナリストとして活躍したこともあり、またピウラで週刊紙を発行した経歴の持ち主でもあるが、何といたっても彼を有名にしたのは、一連の短篇小説である。

彼の作品について語る場合、この作品の伝記的な側面が大いに重要な意味を持っていることを認めざるを得ない。すなわち、主要な作品 *Cuentos andinos* (1920), *De mi casona* (1924), *Matalaché* (1928), そして *Nuevos cuentos andinos* (1938) はすべて、彼がその職にあったときの経験や語録に基づいて書かれたことは明白である。従って、彼の短篇に現われる人物は大なり小なり事件にかかわった人であるという、やや限られた面しか扱われていない恨みがなきにしもあらずである。事実、その点をのみ強調し

て、ロペス・アルブーハルの作品の持つ一大欠点であるかのように指摘する評論家もないはない。しかし、よく調べてみれば、彼の作品がすべて、そうした犯罪や暴力事件に関したもののばかりでないことがわかるし、仮にそうした事件を扱ったからといって、土着の人びとの生活の一面しか扱っていないと誹謗するのは当たらないと言えよう。ロペス・アルブーハルは、ワヌコを中心とする地方の人たちを主に描いているのであるが、ある犯罪事件を取り上げる場合も当事者のいずれの側に加担するでもなく、極めて公平な立場で記述することを忘れていない。これはけだし彼の裁判官としての経歴がもたらしたものであろう。しかも彼の作品では、教訓めいたものをそこから引き出そうとする意図は全く見られない。アンデスの奥地に住む人びとの日頃の生活の一駒を実に詳細に、事実、忠実に描くことが、この作家のスタイルの一大特色となっている。ただし、犯罪を扱うような場合、余りの生々しさに、かえって、まるでそれらが日常茶飯事であるかのように人々に誤解させる恐れもなくはなく、この点から、彼の作品を、特にインディヘニズモの観点から、不完全なものだという評価の下に片付ける立場が生まれてくるものと思われる。

クロリダ・マット・デ・ターナーの *Aves sin nido* やナルシソ・アレステギの作品がその時代のインディオ観に基づいて土着の人たちを扱ったことは周知の事実であり、具体的には、一種のエキゾチックな存在を強調するための手段として、主としてヨーロッパの人たちの好奇心を満足させる目的で書かれたわけであるが、もちろんインディオをはじめ一般に社会の下層に喘ぐ人たちの問題を、社会の支配階級の倫理感に訴えることによって解決しようとする意図もないわけではない。但しこれらの小説ではその問題意識は飽くまでも二次的であり、上すべりのものでしかなかったと言えるのに対し、ロペス・アルブーハルの場合は明らかにインディオが主人公であり、暴力的な事件をめぐる人びとの反応のすべてを客観的に描いている点で、先に挙げた2人の作家の作風とはかなり隔たりがある。彼は土着の人たちの情念や心理を巧みに描き出していると共に、ストーリーにドラマ性を与えているため、次々と起る変化に、読者は知らぬ間に彼ら土着の人たちの世界に引きこまれてしまう。そこにアルブーハルの手腕がうかがえる。コルネホ・ポラールもすでに指摘しているように、ロペス・アルブーハルの短篇小説は、やがてこの種のナラティブに全盛期をもたらす

ための、そしてまたそれを可能たらしめた作品とすることができる。従って、言わば先駆的存在であったわけである。一方、以後のインディヘニズモの作品ほどに社会抗戦的な性格を持つわけでもなく、また作者が、いわゆる第3者の立場から描いているといった事実は、ホセ・マリア・アルゲダスのように自ら土着の人たちの生活に溶けこんだ人の目からはいかにも物足りないものに見えざるを得なかった。アルゲダスの一連のインディオ物が生まれることになったきっかけが、彼自身も告白しているように、とりわけベントゥーラ・ガルシア・アルデロンやロペス・アルブーハルの持つアンデス観への不満にあったとしても、これは当然のことであったと言える。アルゲダスにとって、こうした不満は作者の一方的な解釈に由来するわけだが、特にアルブーハルの作品の中に、あたかも土着の人たちが *a priori* に悲劇的な運命の下に操られ、しかも暴力的な、かつ避け難い最後が予告されているかのように描かれていると考えたからであった。アルゲダスは、アルブーハルの作品の世界で、ケチュアがその最も低いところで停止しているかのように、他の共同体や個人のすぐれた面に全く触れられていないことに強い不満を示したのであった。

しかし、たとえば *Cuentos andinos* の中でロペス・アルブーハルがインディオの原型として主人公を登場させたのでないことは明白であり、彼らの生活の一面を一つの事実として、また与えられた現実に応じて行動する一個の人間として眺める必要があると考えられる。

すでに挙げたアルブーハルの主要な作品の中でも、*Matalaché* は短篇集ではなく、どちらかといえば1篇の中篇小説と呼ぶべきものである。しかも取扱われている内容はペルーにおける奴隷解放以前の世界を描いたものであり、この作品が発表された時点では、すでに解放は行われていた。マタレチェとはホセ・マヌエルという奴隷青年の異名である。黒人と土着の混血で、色の黒さが他の同僚たちと比べて薄いために仲間外れにされ、一方、恵まれた体格と知性ゆえに他の奴隷たちにはない問題意識を持ち、向上心に燃える若者である。*Matalaché* という異名が示すように、かつては名高いドン・フワンで大農場の若い女奴隷を次々とわがものにすることに余念がなかったが、農場主の娘と知り合ってから、2人は愛し合うが、結局、娘の父親に反対されたのみならず、フワン・マヌエルは見せしめのために残酷な手段によって死に至らしめられ、マリア・ルスも悲劇的な最後

が示唆されている。こうして、この中篇小説は、奴隷解放の間近い頃の若い男女の悲恋物語を構成しているわけであるが、ここでも、アルブーハルの立場は、極めて冷静であり、いわゆる奴隷解放運動を目指す意図は全くない。いや、すでに述べたように、ペルーにおいてもはやその必要はなかったのである。それではなぜ、今ごろ、このような作品を書いたのかという疑問が生じても不思議なことではない。この点に関しては、スペインの文芸評論家ラミロ・デ・マエストゥに宛てた手紙が事情を明らかにしてくれる。アルブーハルはこの作品の中で、愛の力の偉大さを強調したかったのである。確かに作品が書かれた時点では奴隷制度は廃止されていたが、人種的差別は依然として厳しく保たれていた。

Matalaché のストーリーはすでに見たように簡単だが、詳しく見れば様々な、そして複雑な側面のあることに誰しも気づく筈である。そこには例えば、奴隷と主人の娘という常識的に考えてもなかなか接近し難い関係を、いかに打開するかという点での作者の苦心の跡が歴然とうかがえるし、女主人公マリア・ルスに仕える女奴隷たちの性格づけにも細かい配慮がなされていることがわかる。

ところで、短篇小説に関していま少し詳しく見てゆくことにしたい。

1920年に発表された *Cuentos andinos* も、そしてそれから18年後に発表された *Nuevos cuentos andinos* も扱っている内容に関してはほとんど同一であると言える。先ず *Cuentos andinos* であるが、収められている10篇の小品のうち、最初の *Los tres jircas* がわれわれ日本人にとって、一種の言い難い親近感を抱かせるのは、そのナラティブのストーリーの展開にあるのではなく、作品全体の持つ雰囲気のせいであることに気づく。*Jircas* とはケチュア語で高い山を意味する。*Maramba*, *Rondos*, *Paucaybamba* の3山の名は「石」、「白髪」、「花咲く」を意味する土語に由来する。土着の人たちにとって、これらの山が彼らの生活と密接に繋がっていて、神格化された存在であり、彼らの信仰の対象となっていることは、まるでわが国の三輪の3山にまつわる伝説を思わせ、古事記の世界を想起させる点で、いやが上にも興味をそそらずにはいない。これは、文学というよりもむしろ文化人類学の分野に属するものであるだろうが、こうした例が、ロペス・アルブーハルの作品には少なくない。

山の神格化の思想は、けだし人類に共通の思想であるのかも知れない。

このことと関連して、先般、カトリック大学で日本文化週間の行事の一つとして上映された「檜山節考」が観客に非常な感動を与えたことが思い出される。Cine foro に加わった人びとの間からこれは正しくペルーはアンデスの世界だという声が聞かれたので、驚いた次第である。死者の眠る場所としての山頂は、当然崇拜の対象となる。言うまでもなく、深沢七郎の作品は日本古来の伝説、そして具体的には中世文学に属する「大和物語」の中に見られる物語りの新しい解釈であるが、しかもそれはインド、中国、朝鮮半島にも広がる伝説であると言われているものだが、アンデスの人びとの間にも共通して存在していることに、そこはかたない親しみを覚えるわけである。

「檜山節考」が問題になったついでにもう一つ興味深い風習のあることが、同じアルブーハルの作品で明らかになる。Ushnam-Jampi と題する第4番目の作品がそれである。原題は、「最後の手段」を意味する土語であり、具体的には村という共同体の規則に従わない人を、特に犯罪者をそこから追放することを意味している。Chupán の町の広場での牛泥棒に対する長老たちの裁きの場面であるが、長老ワカチーノが *chaccha* と呼ばれる焼酎（砂糖きびから取ったもの）の大きな容器を飲んだあと、同座の者に次々と廻してゆく。そして一通り終ったところで口上が始まるのだが、「檜山節考」でおりんと息子の辰平が山に向かう12月の半ばのある夜、集った村人たちの行った行為といかにも似通っていることに驚かされる。

このようにして、*Cuentos andinos* には先ほどから言われてきたような陰惨な情景しか扱われていないという一般的な批判が必ずしも当を得ていないことがわかるであろう。例えば *Soberbia del piojo* という小品は土着の人たちの風習を詳細に描くだけでなく、piojo という通常最も嫌われている生き物に対する作者のやさしさを示している点で、この作品集へのバラエティ賦与に大きく貢献している。

確かに、残酷な場面も決して少なくない。ならず者による犯罪のほかに、地主たちの傍若無人の振舞いなどがしばしば扱われているが、そうした行為に対する反動として、目には目を、の復讐もすさまじい。*Campeón de la muerte* と題する一篇は、娘を奪われた老人の復讐の物語りであるが、ワヌコ地方きってのガンマン Juan Jorge を雇って遂にその目的を遂げたとき、死んだ男 Crispín の目玉をくり抜く場面がある。その理由は *para*

que no me persigan であり、舌を切るのは、para que no avise である。こうした例外的とも言える事件で、例のガンマンは更に死者の心臓を要求している。Sácalo bien. Quiero comérmelo porque es de un cholo muy valiente. これはけだし、アルブーハルの短篇集の中でも最も残酷なシーンと言えるであろう。と同時に、この作品の中で、彼ら土着の人たちの風習や物の考え方などが、多分作者の巧まざる産物だと思うけれども、うかがえるのである。残酷な事件を扱った小品ではあるが、しかも他の作品ではとかくおろそかにされがちだった文体が、ここでは引きしまって、優れた読み物となっている。

Cuentos andinos に彩りを添えるものとして *El hombre de la bandera* を挙げることができよう。いわゆる太平洋戦争でチリ軍が勝利を収めた1883年のワヌコの人たちの悲しみとアパリシオ・ポマレスというインディオの愛国心がこの小品のテーマとなっている。困難に際して英雄が現われ、家貧しくして孝子が出るのたとえで、土着の人たちがいかに祖国を愛しているかの証しとして、記憶にとどめられるべき作品と言える。アパリシオ… Soy indio como ustedes, pero con el corazón muy peruano と言うとき、町の人たちは一斉に立ち上がった。¿Cómo es el mar, taita? と、チリ人が海からやってきたと聞いて問うインディオは、学問はなくとも愛国心には充ち充ちている。

こうした愛国心は言うまでもなく郷土愛から生まれるものである。自分の生まれた土地、祖先の霊の眠る土地への愛着は人間誰しも感じるところであろう。El Licenciado Aponte と題する小品および Cachorro de Tigre と題する作品にも同じ感情が盛られている。前者は村を追われた男の息子フワン・マイジェを主人公とした物語りである。止みがたい帰郷心から、名前を変えて村に帰ってくる。一方 Cachorro de Tigre は、かつて山の王と呼ばれて恐れられた悪党マガリーニョの息子の帰郷と、争えぬ血のつながりによって又しても父譲りの性格を発揮し、父の仇を打つ訳である。

ところで、*Nuevos cuentos andinos* の場合はどうであろうか。この短篇集の成立の時期についてはすでに述べた通りであるが、18年の歳月を経た時点で先に見た短篇集とどう違っているのか早速見てゆきたい。

7篇の短篇から成るこの作品集のなかで一きわ目立つ存在として El brindis de los Yayas が挙げられる。Chupán 出身の青年がリマに行き、

近代的な生活を体験したのち郷里に帰り、これまで *yaya* たちが支配していた昔ながらの社会生活に一大改革をもたらす話であり、ここには *Cuentos andinos* に見られなかった新しい文化の導入をテーマとしたストーリーが展開されると同時に、そのような改革に常に伴う旧勢力の反動のすさまじさが描かれている。先駆者たちにつきまとう苦悩は、ひとりアンデスの人に限られたわけではないが、作者アルブーハルの視点がそこに据えられたことは注目に値する。主人公ポンシアーノ・クルキはしかし遂に *yaya* (長老) たちを説得し *Chupán* の村長になるが、それも束の間、反対者の陰謀に遇って危うく毒殺されそうになる。彼は敵の意図を見抜き、先に彼らに彼らが用意した酒を飲まざるを得なくするが、彼自身も自らの正しさを証明するために敢えてその毒杯をあおる。こうして村に新しい文化の波が押し寄せることになるのであるが、アンデスのひなびた山々にも時代の波の到来は避け難かった。長老たちがしばしば登場するために、スペイン語の中に土着のことばが散りばめられ、一種独特な雰囲気をかもし出している。

しかし一方では、地主の横暴に泣く使用人たちの悲しみが絶えたわけではない。恋人を地主に奪われ、しかもむごい仕打ちを受ける *Aureliano* の純愛と死、そしてその死の知らせを受けて若い生命を自ら絶つ *Aveliana* の姿には古今を通じて変らぬ崇高さがある。この種の物語はスペインの黄金時代の戯曲にもしばしば見られるものであり、わが国の封建時代の市民生活にも似たようなケースがあり、とりわけ義理と人情の板ばさみとなって心中する近松門左衛門の世界でもあるが、ただスペインの戯曲では、悲劇の元凶たる人物は遂には裁かれるのに対し、アンデスの人々には、それがないだけに読者は充ち足りぬ気持ちにならざるを得ないだろう。要するに1930年代のこの地域には依然として力が支配していたのみならず、この傾向がいまなお、この国の社会生活にも根強く残っているように思えてならない。

さればこそ、この短篇集にある *El blanco* という作品も現実味を帯びてくるわけである。かつて大学で同じく法律を勉強した友人が、裁判官として赴任した土地の田舎に、志を折って生活している。たまたま出遇った2人は全く別の世界に住んでいたわけである。友人にとって正義とは身の危険を自ら守ることであった。友人の広い土地の片隅にある納屋に横たわ

るものこそは、友人が正義を守るために標的となった侵入者たちの死骸であった。法治国ペルーだが、山奥の人里離れた土地では、あり得ることである。けだし、この国の現実の縮図と言っても過言ではなかろう。法律に対する不信感がこれほど端的に表わされている作品も稀であろう。

7篇の短篇のうちで恐らく作者が最も気に入っていると思われるのは *Trompiezo* と題する作品であろう。事実、アルブーハルは、この作品をレコードに吹き込んでいるし、それも殆んど暗記していたらしく、原作者にふさわしく時折自在に言葉を変えてはいるものの、その記憶力は驚きに値するし、また、それだけ彼が力を入れた作品であることの何よりの証拠のようにも思われる。*trompiezo* とは *tropiezo* の訛ったものであり、「つまづき」、とりわけ性的な意味での事件を言うようである。教養あるペルー人は、この言葉を直ちに理解するが、一般の人は不思議とその意味を解さないようである。この作品もこの地方、つまりアンデス地方の風習を描くものとして、いわゆる *costumbrista* な作品と言える。主人公カルメロはタクナへの旅から帰ってみると妻の様子が平素とどことなく違うのに気づき、問い正してみると、日曜日の夕方、カプホ農場での仕事をおえて帰ろうとするとき *trompiezo* のあったことを告白する。その相手がカルメロの妹の夫であったことに驚きはつめる。妻に打ち明けられた以上、その相手を殺すか慰謝料をとるかしなければ亭主の面目は丸つぶれになると考えた彼は、結局、後者を要求する方を選ぶ。*padrino* に事の次第を知らせ、例によって、村の *yaya* に裁いてもらうのであるが、予期せぬ額の支払いを約束され、満足するといった筋である。興味深いのはそのいかにも現実的な解決方法である。更に、たとえば妻の様子の変わりようの描写に生彩があり、早いテンポで巧みに妻の心理が描かれている。このような事件は意外とよく見られるものらしく、作者はいかにも扱い馴れた印象を与える。7篇の中では最後から2番目の長さの、小じんまりとした作品であり、事件にまつわる処理の仕方や風習が一きわ注目に値する。犯人との公けの場での取り引きの模様や、また犯された妻の亭主にも半分の責任があることの例えとして引合いに出すこの地方ならではの事物などに興味がそそられるのみならず、とにかくこうした事件にはつきまとう陰惨な印象がなく、あつけらかんとした、むしろ明るい結末となっていて、一種のユーモラスな味わいさえある。裁判が終って夫婦が揃って田舎道を帰る途中に交わす次

のような会話は、そのことを如実に物語っている。

— Oye, Isidora, con un trompiezo de estos cada mes, acabaríamos por comprar todas las tierras de Cairani.

— Entonces no quieres que lleve ya el cuchillo cuando yo vaya sola a “Capujo”

おわりに、Enrique López Albuja の文学の世界を要約すれば、彼自身、先に挙げた短篇集の副題として *novela retaguardista* と述べていることからわかるように、アンデス地域に住む人たちの生活の一端を生き生きとそして事細かく描いた風俗画にたとえることができるであろう。彼が短篇を書いた時代は、イスパノアメリカ文学史の観点からすれば、いわゆる前衛運動のまっ最中であった。López Albújar はそのことを充分承知の上で敢えてこうした写実的で伝統的な手法を選んだのであって、ここに作家としての自負心のようなものを感じることができる。

なお、本稿のために使用したテキスト及び主要参考図書は次の通りである。

- Enrique López Albújar: *Cuentos andinos* Serie narrativa BIBLIOTECA PERUANA, Peisa, Perú, 1986.
Ídem: *Nuevos cuentos andinos*, Librería Studium ediciones, Lima, 5ª edición, 1986.
Ídem: *Matalaché* Serie narrativa BIBLIOTECA PERUANA, Peisa, Perú, 1986.
Cornejo Polar, Antonio: *La novela peruana*. Ed. Horizonte, Lima, 1977.
Delgado, Washington: *Historia de la literatura republicana*. Ediciones RIKCHAY PERU, Lima 1984, 2ª edición.
Enciclopedia Ilustrada del Perú: Tomo 3, Peisa, Lima 1987.
Sánchez, Luis Alberto: *La literatura peruana* (5 tomos). Ed. Ediventas S.A. Lima, 1966.
Sologuren, Javier: *Antología general de la literatura peruana*, Fondo de Cultura Económica, México, 1981.